

2017年11月5日

麻生教会主日礼拝 説教

「神の宮が開くとき」

ヨハネの黙示録15章1節～8節

久保哲哉牧師

1. 神の怒りの頂点

「わたしはまた、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の天使が最後の七つの災いを携えていた。これらの災いで、神の怒りがその極みに達するのである(ヨハネの黙示録15章1節)」

これまでヨハネの黙示録を読み進めてまいりまして、主なる神に由来する様々な災いがこの地上に起こってきたことをみてきました。今日読まれた15章からはついに、終わりの日に起こるとされる「最後の災い」についてが始まっていきます。「神の怒りが『極み』に達する」とありますが、これはどのようなことなのか。注目したいのはこの「極み」というギリシャ語は「終わり」という意味であるということです。神の怒りは永遠に続くものではないのです。また、怒りが頂点に達したときに、人々を滅ぼし尽くすというものではない。終わりがある。その終わりのときまで「忍耐して待つ」ことが求められているということなのだろうと思います。

それで、主なる神はなぜ、このように激しい怒りをもって人間に臨むのか。色々この「神の怒りの終わり」「極み」ということについて考えていると、一昨日の金曜日。札幌地区の婦人会集会の開会礼拝で興味深い聖書箇所と出会ったのです。主イエスが十字架におかかりになる前の晩。受難週の洗足の木曜(主イエスが弟子たちの足を洗われたことを記念する日)に読まれる箇所ですが、次のようにあります。

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜

かれた(ヨハネ13章1節～2節)」とあります。

注目したいのは主イエスが弟子たちを「この上なく愛し抜かれた」という言葉です。昔使っていた口語訳では「最後まで愛し抜かれた」となっていて、もっと昔の文語訳では「極みまで愛し給えり」となっています。

ヨハネの黙示録では「神の怒りが極みに達する」。ヨハネ福音書では主イエスが弟子たちを「極みまで愛し給う」ギリシャ語原文ではこれら言葉は別の言葉なのですけれども、ただ、意味は両方とも「最後」「極み」という点で共通しているといっべてよいでしょう。

では「**極みまで愛す**」とはどういうことでしょうか。主イエスはいいます。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない(ヨハネによる福音書15章12～13節)」

主イエスはその言葉の通りに、わたしたちの命を救うために、この世の罪を全て担って十字架におかかりになりました。ここに愛の極み。この上ない愛がある、というのが聖書の発想です。

ここにキリスト教が「愛の宗教」と言われる所以があるわけですが、では、わたしたちが終わりの日に受けるとされる「神の怒りの極み」とは一体どのようなものなのか。それも、「証の幕屋の神殿」・これはあとで説明しますが、すなわち「神の宮が開くとき」に、神の怒りの極みがわたしたちに臨むとはどのようなことなのか。わたしたちはどのようにこれを受け止めればよいのか。それが今日の主題となります。

2. 何事にもときがある ー愛するとき・怒るときー

よく言われるのは「旧約の神は厳しい裁きの神」で「新約の神は愛の神」。まるで別の神のように受け止めるという仕方です。しかしながら、当然のことですが、主なる神はお一人です。その御心も一つです。旧約と新約で神の性質がお変わりになったというこの受け止め方は正統な受け止め方ではありません。もし、このように受け取っていた方がいたならば、思い直していただければありがたいのです。

すなわち、何事にもときがあるのです。「愛するとき」があります。「罪の自覚を呼び起こすとき」があります。「罪を赦すとき」があります。罪を「裁くとき」があります。そして「救いの完成をみるとき」がある。

まず旧約の時代。主なる神は神の民イスラエルを救うためにモーセを通して「十戒」を授けてくださいました。けれども、これを守り通すことができないという人間の側の「心の問題」でだれも、これを守り通し、救いに入るものが起こされなかった。ただ、「罪の自覚」のみが生じるのみで誰も救われる者がいなかった。そのような悲しみのときが2000年も、3000年も続いた。そしてついに時が満ち、2000年前のクリスマスに「主イエス・キリスト」がこの地上に来てくださった。こうして主の十字架による罪の赦しがこの地上で打ち立てられた結果、現代は「赦しのとき」となりました。しかし、その「赦しのとき」が終わり「裁きのとき」に進む転換期がある。それは明日かもしれないし、1000年後かもしれない。その転換期・将来、主が再び来られる日であるという神の幻・ヴィジョンを語ったのがヨハネの黙示録ということになります。

「赦しのとき」にあるわたしたちから見ると、「神の裁き」の徹底さをみたときに、なぜそこまでするのか。本当にそこに御心があるのかと問わざるを得ない部分があるものですが、その裁き・神の怒りの裏にはどのような御心があるのか。「怒りを通して人々を救う」という御心があるということを知りたいと思います。それは、以前もこの礼拝の場で申したことがあるかと思いますが、言うことを聞かない子どもと、厳しい父の関係を思い浮かべればよいでしょう。

先々週くらいから受付に幼稚園の園だよりを置いています。まだお取りででない方は是非おとりになってお帰りください。そこに記されていることですが、父親の役割のことを「父性」と呼びます。この父性の役割は「子どもの成長に伴って『さまざまな決まり事』や『約束の大切さ』『為すべき使命』『努力』等々を教えること」と言われます。子は約束を破ったり、努力をしなかったりしたら父によって叱られたり罰せされなければなりません。

なぜ、子は父に罰せられなければならないのか。人生を生き抜くために必要なことを学ぶためです。このままでは山あり、谷ありの人生を乗り越えることができないとの判断により、教育的見地から子を叱る。曲がった道をまっすぐにする。それが「父性」の役割です。「過保護」についての弊害は色々言われるようになりましたが、「過保護」が続くとでは子の成長は阻害され、社会に出てから苦勞することになります。そうではなく、しかるべきときに叱り、愛するべきときに愛する。何事にもときがあるというのが聖書的な子育ての発想となります。

ここで注目すべきことはまことの父の怒りは感情まかせに乱暴に発せられるのではないということです。その怒る対象の成長を願っての「怒り」です。背後に「愛」をもった「怒り」です。「怒り」の背後に「愛」がある。つまり「愛」と「怒り」が表裏一体となっはじめて、子どもの育ちを立て上げる要素となります。

これは臨床心理学的にいわれる正しい子育てのテクニックですけれども、さらにいうと、人は「父の諭し」・「怒り」に耐えて、成長していくためには何が必要か。先んじて「母性」が必要な存在なのだそうです。

というのも、最近凶悪な犯罪がどうしても目につきますが、凶悪犯罪を犯してしまった者の家庭に目を向けると、その背後には「過度に厳しい父親」の存在があることが多いといわれます。その「厳しさ」自体は悪いものではないのですが、その厳しさと共に「愛をもってこれを受け止める母親」の存在が欠けているとき、子どもの心はゆがむということなのでしょう。

「父性」に対する「母性」とはすなわち、子どものありのままを受け止め、終わりまで愛し抜く「愛」です。父親でも母性を発揮して子どもを優しく包み込むべきときがあります。逆に母であっても父性を発揮し、子を諭すときもあるでしょう。人生の使命を教えるのは父的な役割です。これに対して叱られ、使命に生きる大変さ。また能力的に未だできないことも含めて受け止める愛。これは母的役割です。この愛を受けて家庭の中で受け入れられているという安心感。この安心感がエネルギーに変わって、父の諭しに忍耐し、

何が善で何が悪であるかを学び、善に生きるのです。そして、心の栄養分が減った所で愛を補給して進むのです。愛は忍耐を生みます。最近の若者の多くがバックボーンが細い。根拠のない自信が少ないと言われるのは、愛が与えられる機会が昔より減っているからというのが牧師としての雑感です。

あの座間市での事件もそうですが、被害者についても犠牲になった十代の者たちの中には家族から捜索願すら出されていなかった者があったとニュースで見ました。十代であるにも係わらず、もし捜索願も出ていないとするならばその「親」と「子」の絆に疑問を持たざるをえないというか、心やみ、自分を大切にできない理由は推して知るべしでしょう。最近のこうした事件をみていると、人間関係の基礎にある父親・母親と犯人の関係性の乏しさに原因があるのだろうという実感があります。人間関係の乏しさが「愛の欠如」が原因であるならば、人間関係がうまくいかないのも聖書的な「罪」ということになるのでしょうか。人間が人生で悩むことの多いことの第一が「人間関係」と言われます。正しい人はいない。すべての人は罪人であるとはその通りだと思わされます。

ある牧師は「人と人との関わり」について「距離感が大事」という文脈で次のように語っていました。「人間(同士)が本当に距離を保つために大事なことは、お互いの間に<言葉>を獲得することです…そして、私どもが真実の愛に根ざす人間関係を作ることができないのは、愛の言葉を獲得していないからです。しかも、このことは、単なる人生をいきていくための技術の問題ではありません。神から与えていただかなければなりません。」と語っていました。

その通りだと思います。思い起こしたいのはヨハネによる福音書1章1節以下です。ここでは「言葉」という単語がでますが、この「言葉」はイエス・キリストのことです。そのことを踏まえて読みましょう。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。(ヨハネによる福音書1章1節～4節)」

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」との御言葉は真実です。人間の最大の課題は「人間関係」と言われますが、言葉を換えれば「それぞれの間で命ある言葉」をいかに語っていくか。これにつきると思わされています。命が通っている「言葉」と「言葉」の実際の直接のやりとりがある所に「愛」が生まれるのです。本当の「愛の絆」が生まれるのです。

3. 主なる神と出会う場所 ―礼拝において神と出会う―

では言葉の内に命を宿すためにはどうしたらよいか。主イエスと出会い、主イエスをこの身体に迎え、わたしたち自身が神の神殿(聖なる宮)とされる以外にないのだろうというのが実感です。

その点で注目したいの今日の箇所「証の幕屋の神殿」という言葉がでることです。この「証の幕屋の神殿」とは一体なにか。出エジプト記によれば、イスラエルの民は荒野の40年以来、パレスチナに定住してからも、王が立てられるまでは神の存在を象徴する場所として、特別の幕屋(テント)を持ち歩いていたと言われます。いわば「神殿」の前身であり、移動用の神殿とってよいと思います。幕屋といってもそれ自体がずいぶんと重厚なものでして、興味ある方は出エジプト記の26章前後をご覧ください。詳細が記されています。

その幕屋の中には先週、幼稚園の劇で使った「契約の箱(十戒入り)」をお見せしましたが、この契約の箱を始めとして、「純金の燭台」や「儀式を行うための豪華な机」や「祭壇」などが収められていたようです。尚、出エジプト記における呼び名についてですが、新共同訳では「臨在の幕屋」。口語訳では「会見の幕屋」となっています。「臨在」とか「会見」と訳された言葉は「時や場所を決めて会うこと」を意味するものと言われます。つまり、イスラエルの民が神がご臨在なされるこの幕屋の所に集まって礼拝をささげた。そしてそこで神と出会った(会見が実現した)ということです。それで「臨在の幕屋」とか「会見の幕屋」と言われるのです。ちなみにヘブライ語では直訳すると「勅令の幕屋」となり、「神と出会って命令を受ける場」を意味したのですが、その「勅令」という言葉が同土に「証」という意味もあったために、

ここでは「証の幕屋」と言われているということになります。おそらく「証」ではなく「勅令」と訳した方がよいと思われませんが、いずれにせよ、そこで神と出会うための場。それが「証の幕屋の神殿」です。

ダビデ王・ソロモン王がエルサレムに神殿を作ったのはこの幕屋を立派にして、神と出会う場をより整えたいという神への愛の思いからだったのだらうと思います。それで、エルサレム神殿が建ってからは「証の幕屋」はその役目を終え、歴史から姿を消すこととなりました。また、エルサレム神殿も紀元70年のユダヤ戦争で嘆きの壁のみを残し崩壊しました。

では、現代を生きるわたしたちは、どこで神と出会うのでしょうか。それは、この日曜の礼拝の場です。この日、神の幕屋・神の宮は開かれまして、だれでも主なる神に近づくことができるのです。もっといえば、これからわたしたちは聖餐を祝いますが、この聖餐の場において、わたしたちは主なる神をこの身に迎えることが赦されています。

礼拝の度ごとに御言葉によって、今を生きる私たちがまことの励ましを受け、愛と祝福の中に生きるものであることがわかります。また、聖餐を味わうときにわたしたちは主イエスのご生涯を思い起こします。主のなされた教えを今、生きているかが問われます。そこで罪の自覚が生まれます。しかしながら、それと同時に、その罪を赦し、これを取り除き、まことの神の子へと歩む道筋が示されていることがわかります。今はふさわしくないものですが、ありのままのわたしが愛によって受け止められている。その愛が私たちに包むとき、本当のなすべき、神よりの使命が与えられ、人生の目的を与えられ、わたしたちは塩で味付けされた愛のある言葉を獲得するのです。そして、血の塩、世の光として世に羽ばたくことができる。その獲得したその愛の言葉をもって神を讃美するのです。隣人を愛するのです。神から与えられた愛の言葉によって隣人を愛するのです。そこに、まことの平安が、安息が愛の世界が生まれるのだらうと思います。

それで聖書は言うのです。「更に、獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たちを見た。（ヨハネの黙示録15章2節）」と。

神に逆らう獣の心もち、キリスト以外に救いを求めてしまいがちなわたしたちですけれども、洗礼を受け、その愛の極みを受け取ったわたしたちは神の怒りを忍耐し、子羊に栄光を帰する歌を歌うことができます。十字架の愛をこの上ない愛を受けつつ、力をいただき、励まされ、神よりの試練を乗り越えていきましょう。神が共におられるから必ず大丈夫です。ここに、神の愛に裏打ちされたまことの希望があります。祈りましょう。